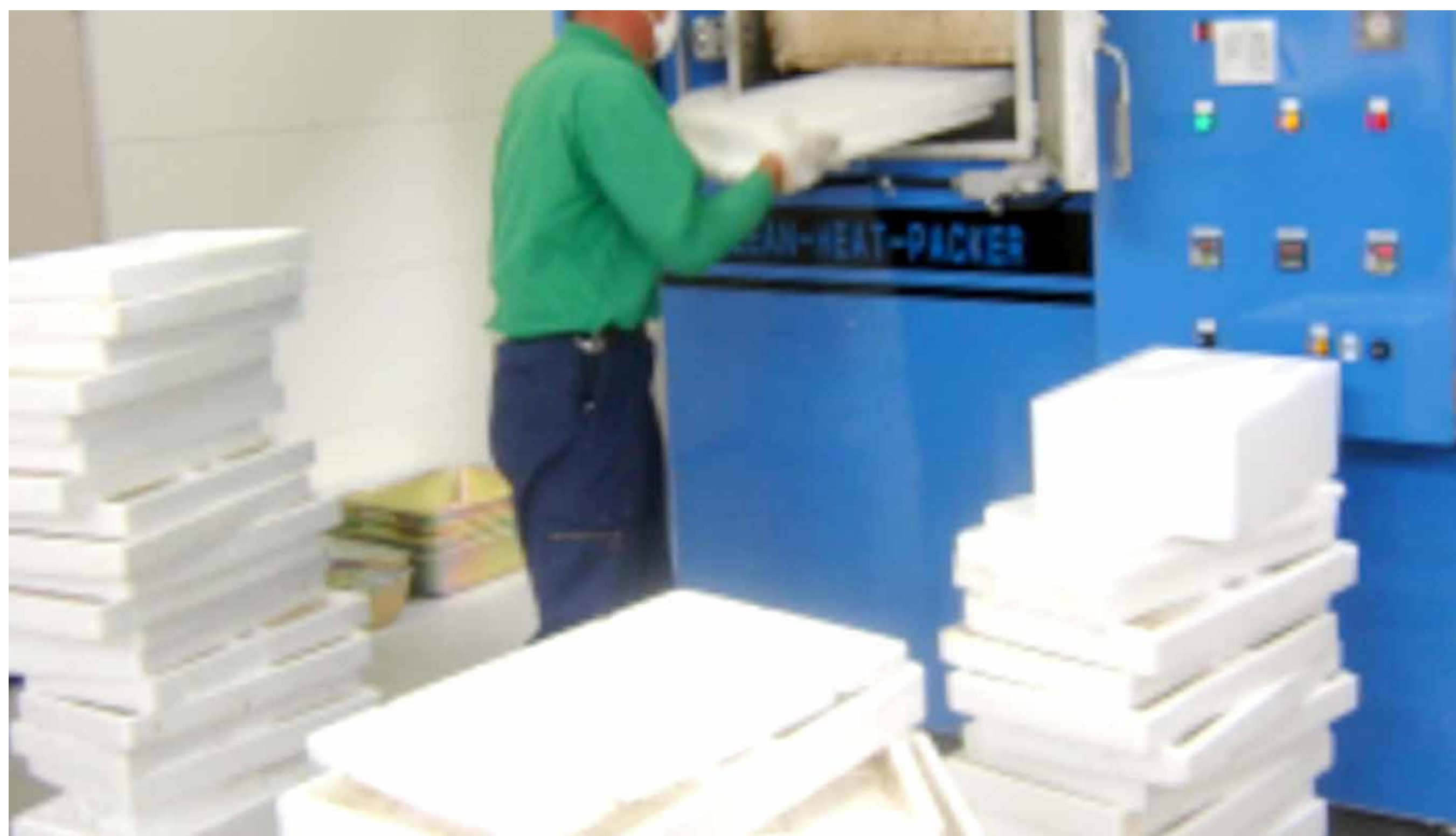




教室の確保などの配慮をしてくれた 地域の方々の理解に感謝。

就労継続支援B型事業所 さくら学園

◎施設長(当時):佐野篤さん



— 発泡スチロールの中間処理の様子 —



— 現在のさくら学園の外観 —

避難所

一般の方々と共に暮らした避難所。作業をすることでリフレッシュできた。

14時46分の地震が起きてすぐ、塩竈市では大津波警報が発令され、防災無線が高台への避難を呼びかけていました。沿岸部に施設があった「さくら学園」では、すぐに避難を開始。高台にあるスーパーに一時避難した後、避難場所に指定されている杉の入小学校に移動しました。

当時施設長だった佐野さんは、避難所では地域の方々がとても配慮してくれた、と感謝の言葉を口にします。避難2日目には、利用者さんと職員のために1つの教室を用意してくれたのです。周りに気を使う機会が増えると職員が追い詰められてしまうため、この配慮が本当にありがたかったといいます。利用者さんも不便な生活の中で我慢をしながら、互いに気を使って生活していました。何もすることがないと内にこもってしまうため、作業をさせてもらうこともできました。学校のプールから水を汲んでトイレの用足しに使用していたので、そのバケツリレーに参加したり、自分たちのフロアの清掃を手伝ったりと、避難所運営に貢献しつつ、体を動かしてリフレッシュすることができたのです。

事業再開

震災前から行っていた廃品回収事業を拡大。現在の作業の中核に成長。

避難所で地域の方々となじんで生活することができたのは、震災前から

行っていた廃品回収事業によって、地域の方に「さくら学園」を認知してもらっていたことが要因のひとつになったようです。そして廃品回収は、利用者さんと職員の頑張りで震災後の事業の要に発展しました。地域を開拓し、町内会を巻き込んで再開した廃品回収は、小さなエリアを動き回るだけでトラックがいっぱいになるほどの成果を生むことができました。収益を上げるだけでなく、利用者さんの作業の確保にも大きく貢献したのです。

今後は

障害者の家族のために、施設を社会資源ととらえ新たな試みに思いを馳せる。

「さくら学園」は津波の被害に遭いながらも建物が残ったため、改修を経て同じ場所で事業を再開することができました。廃品回収をはじめ発泡スチロールの中間処理など、震災後も作業が途絶えることがなかったため、利用者さんもスムーズに日常を取り戻すことができたようです。

一方で、佐野さんは地域で暮らす障害児を持つ保護者のこんな話も耳にしました。給水所では長時間並ばなければ水がもらえなかったのですが、お子さんが多動性障害のため長時間の待機には耐えられず、給水をあきらめて家に帰った、というのです。子どもを見てくれる人がいれば水をもらえるのに、遠くまで買い物に行けるのに、というお母さんの悩みです。

佐野さんは「さくら学園」を社会資源ととらえ、今後そうした声に応えられる体制も考えたいと思っています。ちょっとの時間、安全に預かるならできるかもしれない、それがすごく助かる人がいるならやってみてもいいのではないかと。そんな可能性の実現を模索しようとしています。